

マグロ旗流釣漁業導入試験

熊毛支庁農林水産課

1 目的

熊毛海域周辺には複数の中層式浮魚礁が設置されているが、その利用は、主に小型のカツオ・マグロ類を対象とする曳縄漁業に限られている状況である。

種子島東岸に設置された定置網や同海域での曳縄漁業（ジャンボ曳）では大型のマグロ類の漁獲実績が多々あり、時期によっては浮魚礁への蛸集も考えられることから、過去に、奄美大島地区の旗流釣を導入するための研修会や試験操業が行われた。しかし、試験操業回数が少なかったこともあり、マグロ類の釣果がなく、定着化には至っていない状況である。

これらのことから、当試験において、比較的大型のクロマグロやキハダなどのマグロ類を対象とした旗流釣漁業定着化のための試験操業を実施し、浮魚礁の活用促進及びマグロ類資源の活用の促進を図った。

2 事業の概要

- (1) 導入技術の種類 旗流釣漁業
- (2) 実施場所 種子島東沖海域（図1）
試験操業海域 平成11年、14年に設置した、中層式浮魚礁2基の周辺海域
平成11年設置魚礁 N30° 41.16' , E131° 19.43'
平成14年設置魚礁 N30° 44.35' , E131° 21.07'
- (3) 技術の導入先 奄美地区
- (4) 事業実施者 種子島漁協 浦田地区漁業者
- (5) 事業実施期間 平成16年11月～平成17年3月

3 試験操業方法

- (1) 試験操業
平成16年11月17日（水）、平成17年3月16日（水）の2回実施。
- (2) 試験操業船等
使用漁船：種子島漁協所属 松吉丸 7.9トン
立会者：熊毛支庁 農林水産課 坂口、徳永
- (3) 方法

浮魚礁を魚探で確認し、潮上0.3～0.5マイルから漁具を2組投入し、潮下までおよそ30～40分間潮に乗せて流した後、漁具を回収した。

漁具は図2のとおりであり、水深100m付近を狙った。

付餌は、冷凍ムロアジのぶつ切りを使用し、撒き餌は、冷凍タレクチを大雑把に刻ん

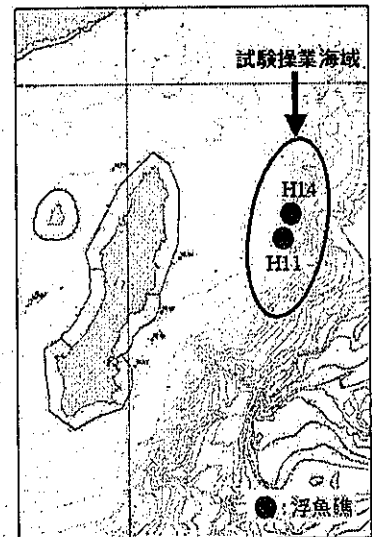


図1 試験操業位置

だものと、ムロアジぶつ切りの余った部分を混合したものを用いた。

4 操業結果

第一回目：平成16年11月17日（水）

2基の中層式浮魚礁周辺において、それぞれ漁具2組を用いて2回操業を実施。

平成14年設置魚礁は魚探で確認され、周辺に魚影反応が確認され、付け餌を取られてはいたが、漁獲対象としたマグロ類を含め漁獲はなかった。

平成11年設置魚礁は、浮魚礁礁体が魚探で確認できなかったため、設置位置付近にて操業した。付け餌を取られてはいたが、魚影の反応もなく、漁獲はなかった。

第2回目：平成17年3月16日（水）

2基の中層式浮魚礁周辺において、それぞれ漁具2組を用いて操業を実施。

平成14年設置魚礁は魚探で確認されたが、周辺に魚影反応は見られなかった。

2回操業を行ったが、マグロ類の漁獲はなく、アカエイに似たエイ類が1尾漁獲された。

同海域で海鳥の小規模な群があり、近づくと3m×3m程度のタレクチの小規模な魚群が海面に固まりマグロ等に追われていると思われたため、ひき縄操業に切り替えたが、1回魚信があったのみで、漁獲はなかった。また、比較的大型の魚は表層の小型魚群の下層を回遊することから、中層曳きの潜航板も用いたが、中層曳きの場合4ノット程度の曳航速度であるため、6ノット程度で曳く表層用の潜航板との同時使用は困難であり、鳥の群を追うようなかたちでの操業は困難であった。大きな魚群が形成されているような場合には中層曳きも有効かと思われる。

平成11年設置魚礁の礁体は確認できなかったが、1回操業し、エイ類2尾が漁獲された。

周辺海域に海鳥はほとんどいなかったが、曳縄操業により、カツオ2尾、ヨコワ1尾が漁獲された。同海域にいた他のジャンボ曳き操業船でもカツオが数尾のみ漁獲されていた様子であった。浮魚礁礁体を確認できなかったものの、カツオ等が蟠集しているようであった。

5 考察

・マグロ類の回遊について

種子島北から東沖では、20kgを超えるマグロ類が曳縄漁や定置網等で漁獲される時期があることや、さらに東沖合では11月頃より宮崎船の近海マグロ延縄操業が行われるな

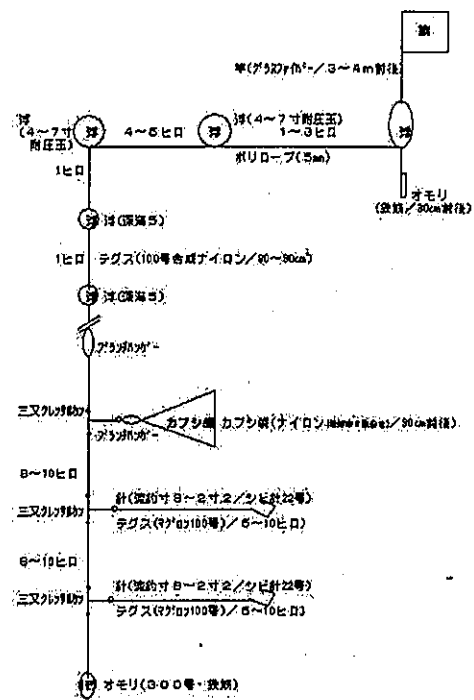


図2 漁具図

ど、比較的大きなマグロ類が回遊する海域となっているようである。

また、最近では、種子島北端の喜志ヶ崎沖合で県外カツオ船が小型のマグロ類を釣っていたとの情報もあり、小型マグロ類の回遊も見られるなど、種子島北から東沖海域は小型から大型のマグロ類が回遊してくる海域と考えられる。

・操業方法について

11月の試験操業では、2～3mの波浪があり、風も次第に強くなるなど、天候条件が悪かったため、一本釣操業がしにくい状況であり、西之表市東沖に出漁する漁船は少ない状況であった。しかし、旗流釣漁業の場合、漁具をポイントに投入した後は潮の流れにまかせるため、多少の時化や風であれば十分に操業が可能であることが窺われた。

旗流釣漁業の経験者によると、投入する漁具数については、一人乗り漁船であれば2組、2人乗りであれば4組の漁具が使いやすい、撒き餌の効果を活かすためには、漁具数が多い方が望ましい、とのことであった。

・旗流釣漁法導入の可能性について

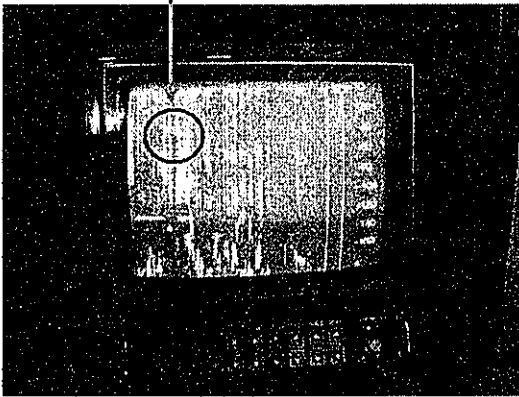
漁業者からの聴き取りや他県船の動向から考えると、旗流釣で対象となる比較的大型のマグロ類が、種子島東沖に回遊してくることは確実視されるが、旗流釣が定着している奄美大島地区等とは異なり、現段階では、種子島東沖海域に回遊してくる時期が明確ではない。

導入するにあたっては、まず、回遊時期を明らかにする必要があるが、旗流釣が比較的に深い水深を対象とするため、表層を対象とする曳縄漁業の状況を見るだけでは回遊状況がわからない状況である。

今後も近海マグロ漁船の動向や曳縄漁船の漁模様を参考にしながら、試験操業を実践していき、回遊時期を明確にしていく必要があると考えられる。

なお、当漁業は、回遊時期が明らかとなれば、時期的に行う漁業として定着する可能性はあると考えられた。

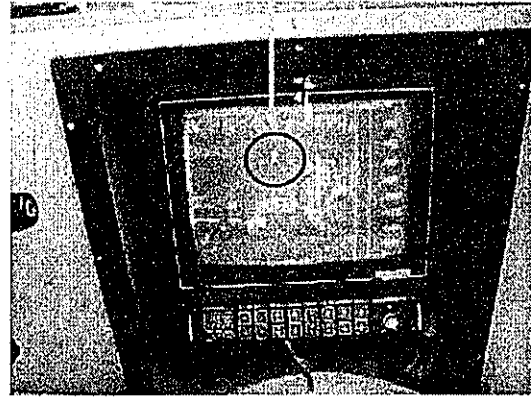
浮魚礁礁体



魚探画像: H16.11.17 H14浮魚礁

水深40~60mの反応が、浮魚礁礁体であり、その下層部には魚群の反応が見られる。

浮魚礁礁体



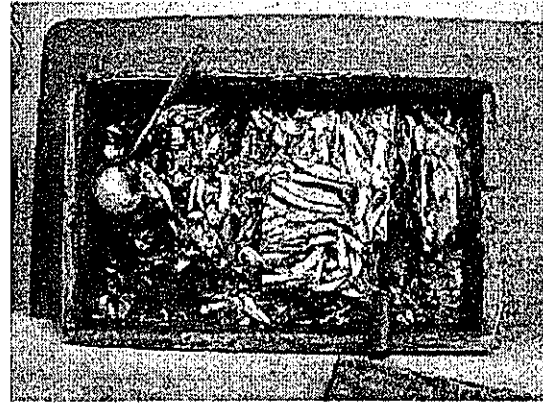
魚探画像: H17.3.16 H14浮魚礁

水深40~50mの反応が、浮魚礁礁体であり、その下層部には魚群の反応が見られる。(礁体の右下)



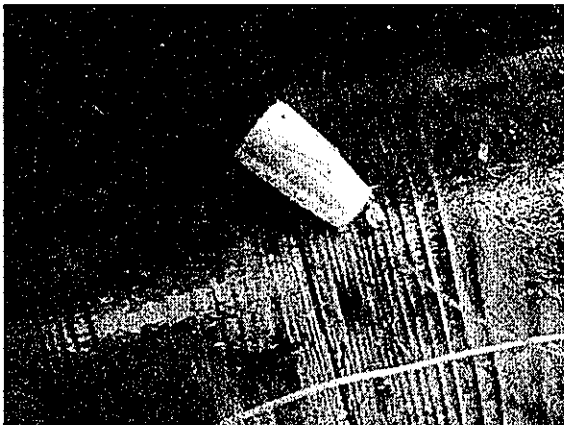
漁具投入直後の状態

左上のフロートは、仕掛けが馴染むと沈んだ状態となる。



まき餌

冷凍のカタクチイワシを適当に包丁で刻む。



付け餌のムロぶつ切りを針にかけた状態。針先が見えないように埋め込む。